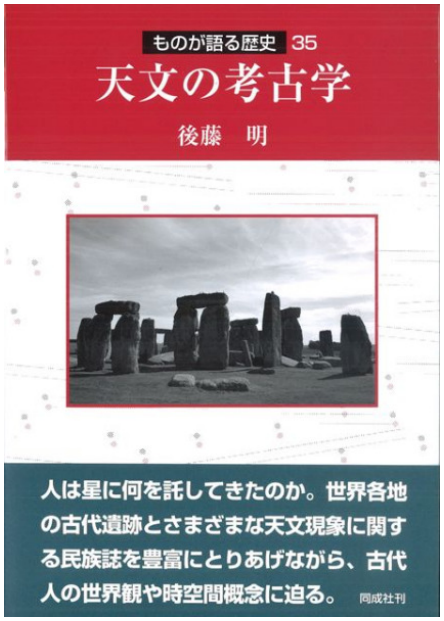
書　評

後藤明著『ものが語る歴史 35　天文の考古学』、東京、同成社、2017 年、267 頁、4,200 円＋税

佐藤　吉文



2017 年は考古天文学に対する日本人の固定観念を覆す画期となったと言っては言い過ぎだろうか。今春、考古天文学に関する書籍が二冊刊行された。一冊は、イタリアの考古天文学者ジューリオ・マリの『古代文明に刻まれた宇宙――天文考古学への招待（原題：*Archaeoastronomy: Introduction to the Science of Stars and Stones*, 2015, Springer）』。そして、もう一冊が本書『天文の考古学』である。

本書は、ミクロネシアやメラネシアを主フィールドとして文化人類学、神話学、そして考古学の分野で多くの仕事を発表してきた著者が、近年進めている文化天文学（Cultural Astronomy）的研究の成果を踏まえながら、考古天文学の現状と課題について論じたものである。学術的な入門書であることを意図しているので、著者自身が直接調査をした経験のない過去と現代の世界各地の天文文化事例についても、他の研究者の手になる民族学や考古天文学の研究成果にもとづいて取り上げ、論じられている。

考古天文学とは、考古学資料にもとづいて、過去の人びとが自身を取り巻く世界の一部をなす空という空間と、空に見出される現象をどのように認識して世界観を構築し、生活を営んだかを追求する考古学の一分野である。なかでも、天体現象を通じたひとによる時間の認知という問題はこの分野の中心的な研究主題であり、それは暦の研究として結実することが多い。

本書は題名に『考古学』を戴いているが、その内容が考古学にとどまらず「文化のなかの天文学（Astronomy in Culture）」と呼ばれるより包括的な領域に及んでいることは、以下に紹介する本書の構成をみても容易に理解されよう。

第１章　概念や名称
第２章　考古学と天文学――その関係の歴史――
第３章　民族誌に見るスカイロア・スターロア
第４章　考古天文学の現状

第５章　古代人と天体

続いて本書の内容を構成に即して見てみたい。第１章では、考古天文学を理解するに当たって必要な基礎的な天文知識の解説に加え、（１）分野名称に潜む問題点と（２）天文を論じる意義が脱西欧中心主義と景観論の視点から提示される。20 世紀初頭までに欧米で学問としての装いを整えたこの分野は、1970 年代ごろから、古代の天文学に関する研究を Archaeoastronomy、非西欧社会における天文文化についての研究を Ethnoastronomy と呼ぶに至り、以後、その名称が定着するようになった。直訳すればそれぞれ考古天文学／民族天文学だが、著者はそれらの名称の根底に「異文化に西洋的な天文学という独立した（中省略）分野を想定」（p. 1）する西欧中心主義を鋭敏に嗅ぎとり、実際には多くの地域や民族のあいだで独自の天文が発達したこと、またそれらは文化に埋め込まれた存在であること（第３章の主題）を指摘する。

そのうえで、考古学や人類学で近年脚光を浴びる景観論が実は景観を十分に論じてこなかったと述べる。軽視されたのは３つの景観、つまり夜の景観、空の景観、流動的な景観であり、その三者の特徴を併せもつのが「天文」であるという。そして、著者は天文へのアプローチとして物語や伝説、そして天文の実践的知識からなる知の体系を総体的に理解することの重要性を説くのである。そうした知の体系が第３章で提示されるスカイロアであり、スターロアである。本章は、考古天文学的研究を展開する上での注意点で締めくくられる。

第２章では、現在の考古天文学に至る歴史が提示される。学問としての考古天文学は、イギリスのストーンヘンジをめぐる論争に始まる。しかしその当初、研究を積極的に推進したのは考古学者ではなく、むしろ天文学者や工学者の側であった。記述的な分析に始まり、やがてコンピューターや統計学を駆使して経験科学としての装いを整えていくこの学問は、緻密な考古学調査による考古学者側の批判を受けて発展しながら、次第にある特徴的な態度――代の天文学を現代的な天文学と同等視し、古代に現代（西欧）天文学のルーツを求める――を自明化する。天文学だけでなく統計学的手法にもとづいて厳密な科学としての天文学を過去の社会に見出さんとする研究姿勢ではもちろんのこと、民族事例や発掘資料からそれぞれの社会におけるひとと天体の関係を見出そうとする研究にもこの態度は共通する。

その一方で著者は、天文のルーツよりも天文の民俗、とりわけ天文と関わる神話や宇宙観に目を向ける新たな研究動向を評価する。遺跡構造と天文現象との関係を中心主題とするエティックな分析に終始する研究に対する不満として近年現れてきたこの潮流は、神話や儀礼などを題材に民族固有の宇宙論や天文観といったエミックな天文分析を目指す。古文書や考古学資料に天文観測にまつわる民族事例のみを求めた従来の民族天文学や考古天文学と異なり、著者は、この潮流が民族考古学的立場から天文の考古学に資するだけでなく、西欧天文学を相対化する可能性を秘めていると指摘する。

星空の読み方は世界各地の暮らしと多面的に結びついている。例えば、星は季節を知る手立ての一つであった。しかし、注目される特徴（色や並び、明るさなど）はさまざまであるし、読み取られる季節も一様ではない。明け方に昇るカノープスに雨季の到来や成年

式の時季を読み取ることもあれば（ロヴェドゥ／南アフリカ）、1 年の始まりとみる（ソト、ツワナ、ヴェンダ／同前）こともあった。また同じ季節の移り変わりをプレアデスの出現や没入で測る人びともいるし（東アフリカ）、太陽の出没や影を重視する人びともいる（ナヴァホ、ズニ、ホピ／北米）。そうした天体の動きは時に地平線という景観の上に暦として記録された。

しかし、アフリカ、極北地域、北米、中南米、太平洋諸島、日本を事例に第 3 章で指摘されるのは、世界各地の天文文化が単なる観測行為ではなく、象徴を操作してコスモロジーと交渉するための一連の行為群の一部であるという事実である。例えば星空は、季節観だけなく多様な世界観を生む。天の中心星や周極星の存在は不死や天帝、極地域では世界樹や宇宙軸といった観念をもたらす一方、対極に位置するため同時に天に昇らない星には対立する神話上の主役たちが結びつけられ、世界を語る原理となる。アイヌや極地方に暮らす人びとは天空を成層構造として捉えたし、赤道付近のキリバスでは、夜空を星がハシゴを伝って昇る天井のように捉え、星の見える角度から航海の目的地や現在地を把握した。

人びとは適切な時期に適切な儀礼を行うことで神話上の主役たちが成り立たせている世界の原理と交渉する。一定のサイクルで繰り返される天体の運行はそうした原理の表象であり、神話的存在そのものでもある。そうした存在によって象徴される時の進行が現実世界における将来の暮らしを約束するように、人びとは儀礼を通じて天体の生み出すリズムとの調和に努める。儀礼は、世界観をあらわした家屋のつくりや家屋から観測される天空を含めた周囲景観の中で、代々司式者に継承されてきた儀器や天空図などさまざまなモノや神話に導かれて執り行われる一連の行為群として結実する。

こうして、物質文化や儀礼的行為、神話や信仰が相互参照する状況においてはじめて天文は意味をなすのであり、伝統的な考古天文学にあるような遺跡構造と天体の関係をいかに「正確」に突き詰めても、対象文化における天文の意味を明らかにしたとは言えないと著者は主張する。

以上のような民族事例に対して、第 4 章では、天文との関係が論じられている世界各地の遺跡が地域毎に紹介される。その視野は、エジプト、メソポタミア、ヨーロッパ、アジア各域、北米、メソアメリカ、アンデス、太平洋諸島、ミクロネシア、ポリネシア、日本の各地に及び、研究が盛んな地域については時代や文化、社会毎に研究の現状が整理されている。

民族事例からも推測がつくように天文と遺跡の関係はさまざまだ。方位や天体の出没方向を意識した建築軸の設定や建造物群の全体配置というかたちをとることもあれば、建物内部の特定の場所から特定時期の天体の出没地点や天頂通過へ向けた視線の誘導や、逆に決まった時期に祭壇など意図された室内施設へ向かって特定の投影が起きるように意図された光線誘導というかたちで表現されることもあった。また、天体と関連づけられる考古学的遺構も、建物もピラミッドや神殿といった記念碑的建造物から北米平原地方のメディスン・ホイールと呼ばれる直径 20m ほどの遺構、さらには北米ニューメキシコ州チャコ渓谷のファジャダ・ビュートで見られるサン・ダガーのように屋外に設けられた岩面画に至るまで実にさまざまであるし、関連づけられる天体も太陽、月、金星、北極星、大犬座α星（シリウス）、プレアデス、牡牛座α星（アルデバラン）、オリオン・ベルトなど一様で

はない。他にも壁画や岩面画を通じて、彗星や超新星爆発を記録した例なども知られている。いずれにしても、考古学者が着目した周期的な観測が可能な天体と関連する遺跡や遺構は暦を把握するための装置として解釈された。

世界各地の考古天文学の研究事例を整理検討しながら、しかし著者は、建物や遺構の方位や斜角がいくら特定日時の天文現象の観測に適していても、そのことは必ずしも時間的な正確さを保証しない、逆説的に言えば、遺跡や遺構が天体と関連づけられるにしても、前者は後者の観測を正確に実施する場とは限らないという事実こそが重要だと主張する。例えば、見かけ上の太陽の動きは至点に近づくにつれて次第に小さくなる。そのため、至日の日の出・日の入りの方向に一致するストーンヘンジの建築軸は、その前後数日の日の出・日の入りにも一致する。このように、空間的な正確さは正確な太陽暦を保証しないのである。

むしろ重要なのは、天体と遺跡・遺構の関係を明らかにすることだけでなく、「天文現象を社会や文化的慣習と連結するための思考の枠組み」にまでそれらの研究を広げることにあるという。そのためには、単に数学的厳密さを追求するばかりでなく、従来別個に論じられてきた宇宙創生神話やコスモロジー、天体を使った実践的な知識を統合的に理解する枠組みを構築し、考古学資料の解釈に適用していくことが、考古天文学をより生産的にする方法だと指摘する。

以上の整理を踏まえた上で、第５章では本書の結論として考古天文学が現状で抱える課題を指摘するとともにその克服に向けた提言が提示される。

インゴルドの主張に同意して著者が述べるように、構造物を「建てる」という実践を介して個人が世界のうちに「住まうこと」として理解できるとすれば、スカイスケープのうちに見出される宇宙の原理を建築を通じて把握する行為は、その原理と社会のあり方との間に対応関係を見出すことに他ならない。そのとき建築を介して表明されるのは単なる天体観測結果としての暦にとどまらない。毎年決まった時期に繰り返り催される祭礼に示されるように、それは暦によって知らされる生命のリズムを儀礼を介して制御し、社会を再生産するための公式であった。

このような考え方に立脚するならば、もっぱら建築構造と天体との関係を把握する現状の考古天文学は、古代人と天体の関係を十分に理解したとは言えない。一見普遍的な観念として考古天文学的研究においてしばしば注目されてきた東西方位というものでさえ、民族事例に照らせば、分点日の太陽の出没地点に一致する方角とは言い切れない恣意性をもつ観念であることが明らかだからだ。例えば、地下界を死者の世界とみなす文化においては天体の出没方向と東西観念との結びつきが自ずと地上と逆転するように。意味と象徴に満ち溢れた時空間において、それぞれの要素は相互参照のネットワークの中で社会的エージェントとなる。天体もその観察行為も観察空間としての建築も社会的エージェントであり、建築の構造と天体の関係を古代の人びとがどれだけ「正確」に把握していたかを問うだけでは意味がないと著者は指摘する。むしろ、重要視すべきなのは「観察」行為そのものであり、観察を経た儀礼を介して天体の動向に「関与」することこそがひとにとって意味ある行為なのだと論じるのである。それらすべての要素が「束ね」られ、共関与することで天文という経験の領域が意味あるものとして構築されるのである。

以上が、本書の概要である。本邦初の考古天文学に関する入門書として、分野名称をめぐる問題と最低限必要な天文学的知識についての概説に始まり、分野の形成史、研究上の注意点と擬似考古天文学との相違、そして広く世界中の考古天文学の現状についての紹介に至るまで考古天文学に関心をもつ読者にこの分野の全貌を体系的に示した内容になっている。加えて、本書では、世界各地の現代の天文文化の紹介に一つの章が費やされており、第1章では基本的な天文学的知識の解説とともに、天文文化のフィールド調査の参考になるような調査項目リストも紹介されている。こうした特徴は、やや遅れて翻訳書が刊行されたマリの手になる入門書と大きく異なる構成だ。

著者が序文で認めるように、確かに考古天文学や天文民族学の事例を配した各章には記述の濃淡があり、言及されていない地域もある。しかしながら、近年 Springer 社から刊行された Clive L. N. Ruggles（クライブ・ラグレス）編 *Handbooks of Archaeoastronomy and Ethnoastronomy.*（2015）が全3巻、全218章、総頁数2,297頁に及ぶ浩瀚な書であることを思えば、世界中の事例研究を網羅的に一冊の入門書に収めるのは困難であろう。やや難解な記述は認められるものの、それでも一読してこれだけ多数の事例を比較検討できる本書の価値は事例研究の偏りを理由に貶められるものではない。

著者は、本書執筆の動機を、日本における考古天文学研究が立ち遅れていることへの危機感にあると述べている。それは、この用語が日本人考古学者のあいだにエーリッヒ・フォン・デニケンやグラハム・ハンコックら著作に代表される擬似考古学（Pseudoarchaeology）を想起させるからである。不正確な“科学的”手続きにもとづいて類推を重ね、自身の信念を証明しようとする擬似科学の一つである擬似考古学では、天文学と考古学が科学的に誤ったかたちで関係づけられたが、一般の読者の空想を大いに刺激したそれらの著作群は、研究者サロンにおける考古天文学観の（好ましくない方向への）形成にも大いに力を振るった。また、この分野の形成史に触れて著者が指摘するように、日本の考古学がマルクス主義的な文明史観に強く影響されて生業など生態学的側面をもっぱら研究の対象とし、上部構造に相当する宗教や天文など目に見えない文化の側面についての検討を比較的近年まで避けてきたこととも関わろう。そのような学術的風潮にあって、過去の社会において特定の天体がもつ文化的意味やそこに関わるひとの行為や実践について十分な検討を示さずに特定方向に恣意的な重要性を与え、構造物との関係を論じかねない考古天文学的研究は日本の考古学界において不信の的であった。その意味で、第1章で考古天文学的研究を展開する際の注意点として、過去の社会において特定の天体に付与された文化的意味を十分に検討するだけでなく、ひとの身体と身体を通した行為、構造物や景観との関係として特定方向の重要性を注意深く検討すべきとする筆者の指摘は、日本の考古学界における考古天文学への不信を少なからず払拭する契機となるだろう。だからこそ、自然科学的研究手法を強調するマリの著作とともに、文化という側面を強調して考古天文学にあたろうとする本書が同時刊行された 2017 年は一つの画期なのである。なお、身体と構造物、景観との関係については、「視線」を介した空間の身体化という観点から坂井（2017）による理論的まとめがあるので、関心のある方はそちらをご一読いただきたい。

さて、そのような本書のなかで、著者の主張は「観測から観察へ」という一言（p. 236）

に凝縮されている。プーキタットの「束ね理論（bundling）」をふまえながら（Pauketat 2013）、「観察行為」そのものと、人工物や神話、方位、季節、動植物、儀礼等が社会的アクターとして相互参照するなかで立ち現れてくる天文経験こそが問われるべきであるという指摘は、今後の考古天文学の方向性を暗示する。このような発展を遂げるべく、著者は、学史上指摘されながら未だ十分に検討されていないいくつかの課題を列挙している（pp. 237-238）が、ここでは本書に対するコメントとして、天文文化の可視化という問題に絞って本書では明確に示されない論点を加えておきたい。

本書では、天文現象に世界のあり方と一致する宇宙の原理を読み取らんとする、実に豊かな天文文化が示されている。考古天文学が遺跡構造や建築構造とスカイスケープを含めた周囲景観との間に見出してきたさまざまな関係や、そこから読み取れる時間把握のあり方（つまり、暦）もまさにそうした天文文化の一端である。しかし、たとえ豊かな天文文化が培われていても、それらは必ずしも建築構造や遺跡構造、そして実践を介して物質化され、視認されるとは限らない。物質化を妨げる要因の一つは文化的な慣習である。著者は、星を指さすことを無礼な行為として認識する北米のクロウ族の事例を踏まえ、天体の聖別とタブー視がその天体に関わる天文文化を建築物として可視化するのを妨げる可能性を指摘している。しかし考古学者の視点に立てば、宗教的な規制など文化的慣習という分析枠組みを導入した途端、慣習は固定的にとらえられ、ひとの社会や文化を静態的に捉えることにつながる恐れがある。そのため、文化的慣習という分析枠組みを導入するにしても、社会や文化の動態を把握する別の分析視点が必要になってくる。

本来恣意的な可視化行為が、恣意性を失う状況はどのように生み出されるのか。先スペイン期アンデスの考古学研究をフィールドに国家形成論に従事してきた評者の立場からいえば、ここで可視化を左右する要因として考慮すべきなのは「権力」という視点であると考える。本書では取り上げられていないが、アンデスの考古天文学的研究に興味深い事例がある。スペイン人による南米アンデスの植民地化からおよそ 70 年を経たペルー中央高地のワロチリ地方について記した文書には、スペイン人聖職者による度重なるキリスト教の布教活動にもかかわらず在来信仰を破棄しない先住民たちが頑なに伝えてきた神話や宇宙論、天文文化についての記載がある。スペイン人の弾圧に屈せず受け継がれてきたその豊かな文化は、スペイン人によって征服されたインカ帝国の時代の文化を反映するだけでなく、それ以前にまで遡るものだと考えられている。このワロチリ人がインカ時代に新たに築いた集落を調査したペルー人考古学者 B. マコウスキはしかし、予想に反して、そこでワロチリ人たちの豊かな天文文化が儀礼用建築を介して可視化された痕跡を認めることができなかった。ワロチリ人と共通した天文文化をもつインカ帝国の支配者がともに重要視する天体や星座を視認する装置を首都クスコに張り巡らせ、その暦の一部に組み込んでいた事実と照らし合わせれば、その対比は鮮明である。では何が天文文化の可視化をめぐって差異を生じさせるのか。この問題へ切り込む視点の一つが「権力」である。

インカのような複数の民族集団をその支配下に組み入れた「帝国」において、複数の異なるコスモヴィジョンが可視化されるような事態は、政治制度の不安定化を招く。したがって、いつ、どこで、誰によって、どのように、天文現象が可視化されるのかは、インカの支配層がどのように世界の現状を正当化するかというイデオロギーとも関わることにな

る。著者が今後の考古天文学の発展に寄与するとして注目する宇宙観や創世神話、コスモロジーは、時に権力に左右され、新たに創造、あるいは改変させられることもあるだろう。さらに、個人的必要を超えた記念碑的建造物に天文現象を可視化する場合、建設に必要な物資や労働力の動員という点から見ても可視化と権力は結びつく。日常生活を営む住居についても同様である。伝統社会で住まいを建てるには、一般に血縁や地縁を背景に他人の援助を必要とする。その意味で建築は文化的必要に沿うばかりではなく、住人の社会関係の表象でもある。全ての社会関係は権力関係として捉えることができるから、住居建築もまた社会的な諸力の所産として捉えることができよう。こうして、性質や規模がどうであれ、建築が天文現象を可視化する媒体である場合には、そこに介在しうる権力への視点を無視することはできないことになる。天文文化が特定の人間集団の権力を正当化するイデオロギーと結びついていたインカ帝国を始めとした古代国家について論じる場合にはなおさらである。慣習を権力の視点から丹念に読み解く必要が出てくるのである。

権力への着目はすでに始まっている。欧州文化天文学会（Société Européennne pour L’Astronomie dans la Culture）は、2010 年に天文学と権力の関係をテーマに研究大会を開催し、その成果報告が昨年、BAR International Series の一冊に加わった。また、冒頭でも紹介したマリの手になる入門書でも権力と景観の関係について一章が割かれている。天文経験が事物を含めたさまざまな社会的アクター間の相互作用の中で生成するのであれば、著者が目指す考古天文学においても権力への視点を欠かすことはできないと考える。

とはいえ、天文民族学をもあわせた文化天文学への啓蒙書であり考古天文学の入門書という本書の価値が色褪せることはない。考古天文学に関心をおもちの方だけでなく、考古学には関心のない文化人類学徒諸氏、とりわけ景観論に関心のある諸氏にもぜひお読みいただき、それをきっかけにたまには夜空を見上げていただきたい。そういう書である。

参考文献

（日本語文献）

坂井正人

2017 「パコパンパ神殿における建築活動・景観・視線・権力」、関雄二（編）『アンデス文明−神殿から読み取る権力の世界』、pp. 53-81、 臨川書店。

マリ、ジューリオ

2017 『古代文明に刻まれた宇宙ー天文考古学への招待』、上田晴彦訳、青土社。(Magli, Giulio, 2015, *Archaeoastronomy: Introduction to the Science of Stars and Stones*, New York: Springer.)

（英語文献）

Pauketat, Timothy R.

2013 *An Archaeology of the Cosmos: Rethinking Agency and Religion in Ancient America*, London and New York: Routledge.

Rappenglück, Michael A., Barbara Rappenglück, Nicholas Campion, and Fabio Silva

(eds.)

2016 *Astronomy and Power: How Worlds Are Structured, Proceedings of the SEAC 2010 Conference.* (BAR International Series 2794), Oxford: British Archaeological Reports Ltd.

Ruggles, Clive L. N. (ed.)

2015 *Handbooks of Archaeoastronomy and Ethnoastronomy*, New York: Springer.